

YU-INFORMATION

No.120

山口大学広報誌

9

2014

特集

時代と共に



cover story

[今月の表紙]

今年リニューアルになった総合図書館。膨大な資料は、まだ全てが新しい居場所に戻っていません。その1号館2階にある「りぶプラザ」は、壁全体の白いイメージと高い天井で、他のスペースに対して異彩を放っています。最新の端末が並ぶ壮観な景色のなか、一人の学生が図書館でしか触れられない書籍を重そうに抱えています。過去から連なり、未だ進化を続ける知識の宝庫は、彼女にどんな未来を見せるのでしょうか。

contents

02

今月の特集

時代と共に

03 人文学部 06 教育学部 09 経済学部 12 理学部

15 CLOSE-UP TOPIC

16 強豪フットサル部を紹介!

姫山祭を間近に控える実委を直撃!

17

Qを解く9番目の新学部

国際総合科学部

山口大学 国際総合科学部 設置準備委員会委員長 糸長雅弘

20 OB/OG紹介

21 What's New? YU-PRSS

22 EVENT SCHEDULE

Move with the Times

時代 と 共に。

2015年に創基200年を迎える山口大学。大学は自ら求める進化だけでなく、時代が移り、変わる社会が求める進化に真摯に向き合ってきました。時代とともに進化という変化を身に纏ってきた山口大学の人文学部、教育学部、経済学部、そして理学部。ここで各学部の特徴ある研究を紹介します。大学で何を学ぶのか、夢を持っている人にも、自分の未来を探している人にも、この特集はその助けになるでしょう。

言語の多様性と 普遍性について

近年、急速なグローバル化の流れの中で、言語の世界が大きく変わろうとしています。一部の超巨大言語が出現してその勢力を拡大し、少数言語は追いやられて消滅の危機を迎えています。また、時代の影響を受けて、言語自体もどんどん変化しています。こうした背景のもと、言語の多様性と普遍性をテーマに、少数言語の現地調査を通して記述研究を行っている乾准教授にお話を伺いました。

山口大学人文学部 准教授

乾 秀行

Inui Hideyuki

言語学者。主な研究活動はエチオピアでのフィールドワークによる少数言語の記述研究。

時代に合わせて 言語は絶えず変化するもの

言語学とは、人間のことばの仕組みを研究する学問です。近代言語学の祖といわれるソシュールのことばを借りれば、パロール(言語データ)をたくさん集めて分析し、ラング(言語の規則)を見つけることになります。

ところで、言語の不思議なところは、人間の力では決して変えることができない規則だということです。それがほかの規則、例えば法律や経済の規則とは決定的に違うところですね。

さらに面白いことに、いつの間にかその言語の規則は変化していきます。例えば、現在の日本人は平安時代と同じことばを使っていませんし、カタカナ語なしに会話は成り立たないでしょう。また単に語彙面だけでなく、音(子音や母音の数)や語順も、長い年月の間に少しずつその体系を変えていきます。英語の語順は、厳格なS-V-O(主語-動詞-目的語)ですが、その祖先にあたる古いインド・ヨーロッパ語は、日本語と同じく、元々S-O-V(主語-目的語-動詞)でした。言語は100年単位ではあまり変化していないようでも、千年単位で見ると、その姿を大きく変えていることがわかります。どんな言語であれ、時代と共に体系を少しずつ変えていくのです。

生きたことばを求めて フィールドワークへ

ところで、言語データの集め方は人それぞれで、具体的な音声データの聞き取りから始める人もいれば、自分の頭で文を考える人もいます。あるいは、今のよう便利なネット社会であれば、検索エンジンのクリック一つで、あっという間にもすごい数の言語データを集めることも可能です。歴史言語学という分野もあります。こちらは何千年も前の言語の姿を考えるわけですから、直接話し手に聞くわけにはいきません。過去の文字資料から、どのような言語変化が起こったのかを間接的に探ることになります。いずれにせよ、どのような言語データの集め方をしても、言語学はできます。

私が行っているアプローチは、フィールド言語学といわれる分野です。言語データを集めるために、わざわざアフリカの奥地まで出かけていくという、最も効率の悪いデータの集め方をしています。マラリアに代表されるような病気の罹患リスクを心配しなければなりませんし、悪路を四輪駆動で走ることも数日、ようやく辿り着いた調査地には水も電気も

ない、なんてこともよくあります。まともなホテルすら見つけるのが困難な場合も多いのです。しかし、世界でその言語を調査した言語学者が誰もいないことが魅力です。そこには人が住んでいて、生きたことばが話されています。そのことばには、文法や辞書がないだけでなく、文字すらありません。言語の規則が人の頭の中にあって、それが話したことばによって代々引き継がれているのです。実は、そういった言語が、世界にはまだまだたくさんあります。

言語の多様性

ある統計によると、現在、世界で使われている言語は、約7,000あるといわれています。驚くことにその多くが、まだ誰も調査したことがない言語なのです。国の名前の後に「語」を付ければ言語名になるように思うかもしれませんが、英語、ドイツ語、フランス語、韓国語、中国語はありますが、エチオピア語やケニア語などは存在しません。国家と言語の関係はとても厄介なテーマなのです。国によれば、国内に何百という言語が話されているところもあります。言語はいつも国家と一対一に対応しないので、言語学的には母国語より母語というべきですね。

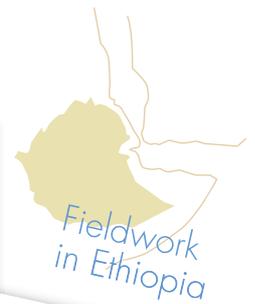
北海道にはアイヌ民族が住んでいるといわれています。彼らの母語はアイヌ語であると言いたいところですが、多くのアイヌ民族の母語は日本語に言語交替しています。現在、アイヌ語を話せるのは高齢者がほとんどで、近い将来アイヌ語を話す人がいなくなるかもしれないと危惧されています。アイヌ人であっても、政治的、経済的、社会的要因から、言語が次世代へ継承されていないのです。同じことが沖縄の方言にも起こっています。おじやおばの話す沖縄の方言を、若い世代が理解できなくなっているのです。

少数言語調査のため アフリカ・エチオピアへ

私が研究対象にしているアフリカの場合は、そういった言語環境の点では、比較的いい状態を保っている地域の一つだと思います。それほど壊滅的な打撃を受けておらず、少数言語はまだ十分活力を持って次世代へ引き継がれていくように感じます。とはいえ、21世紀に入ってからアフリカ各地に多くの資本が流れ込み、急速な開発が進み、大言語への言語交替が進行していることも事実です。私の調査訪問国であるエチオピアも都市部に人口が



コウェグ語のインフォーマントのマヤさん。



クチュル村の子どもたち。フィールドワークで訪れたエチオピアにて。

流入し、その例外に

漏れず、行く度にそれを実感します。

現在、エチオピアには、大小80を越える言語が話されています。大きく分けてセム系、クシ系、オモ系、ナイルサハラ系の4つの系統の異なる言語集団があり、それぞれが、かなり異なった言語構造を有しています。その中でも、セム系のアムハラ語が、エチオピア人の共通語となっています。アムハラ文字と呼ばれる日本語のカタ文字に少し似た文字を用いて表記されます。少数言語を母語とする子どもたちも、小学校に入るとアムハラ語で授業を受け、否定なしにアムハラ文字を身につけていくことになります。高校に入ると、今度は英語で授業が行われます。最近では、それぞれの民族語の授業も行われ始めましたが、少数言語はそもそも文字を持っていないため、当然、辞書も文法書もなく、少数言語の授業はうまくいっていないことが多いようです。

無から創り出す 少数言語の記述研究

私がここ数年研究しているのは、そういった少数言語の記述研究です。最初は、基礎語彙の調査から始まります。例えばアムハラ語の「ラス(「頭」の意)」は何というかと質問すると、インフォーマントと呼ばれる言語情報提供者が、例えばナイルサハラ系のコウェグ語では「シュボ」と答えてくれます。これを延々繰り返すわけです。

エチオピアの言語には喉音を緊張させて発音する子音がよく登場します。「コルク栓を抜く時の音」



⤴ 乾ゼミでは学生同士の活発な意見が飛び交う

言語を知ることは 異文化を知ること

は今まさに大半の言語、そして文化を地球上から葬り去ろうとしているのですね。

言語の多様性の中に 普遍性を見つける

言語はその民族を映す鏡です。それを失うことは、その民族の世界観を表す方法、もしくは文化がなくなることを意味します。我々日本人も日本語、あるいは方言でしか表現できないことばがあると思います。言語の多様性は、まさに人類の英知の結晶とも言えるでしょう。

言語学のさらに面白いところは、そういった言語の多様性の中に、人間の言語である以上、共通点が見つかることです。これが言語の普遍性です。ある基準で捉え直してみると、統一的に説明できる一般原理が見つかります。しかし、その普遍性に近づくためには、言語の多様性を知ることから始めなければなりません。いろいろな言語を調べていくと、一般化する上で興味深い言語構造が見つかって、今までの常識が覆されることがあるからです。研究した言語の数が増えれば増えるほど、もの見方が広がっていきます。できるだけ多くの言語を観察することこそが、言語の普遍性を見つける最善策なのです。つまり「急がば回れ」ですね。

豊かな発想と柔軟性を 与えてくれる言語学への誘い

最後に、山口大学人文学部の言語情報学コースに所属する学生について、簡単に紹介しておきましょう。最近の傾向ですが、言語学の魅力に惹かれて入ってくる学生が増えてきました。演習では、今までやったことのない言語に取り組みます。文字を覚え、発音の練習をし、文法構造を分析し、発表します。ゼミ生には卒業論文のテーマを興味に応じて自由に選ばせます。沖縄方言のイントネーションの特徴を研究している学生もいれば、コーカサス諸語にみられる能格と呼ばれる特異な統語構造を研究している学生、動詞が先頭に来る言語(V-S-OあるいはV-O-S)を情報の流れの点から研究している学生もいます。自分しか研究していないというのが、彼らのモチベーションの秘訣ですね。一つ一つ異なる言語の精神世界を理解していくことで、それだけ複眼的に世界を見ることになっていくので、豊かな発想と柔軟性が自然と身につけていくと信じます。国立大学で言語学講座があるところは限られています。ぜひ我々と一緒に言語学の世界に足を踏み入れてみませんか。

と音声学の教科書に説明が載っているのですが、実際に目の前でそれを聞いて書き取った時には、ちょっとした感動を覚えます。まさにフィールドワークの楽しさはこんなところにもあります。

500語ぐらい単語の聞き取り調査をすると、その言語で使われている音が一通り出てくるので、一旦全体を見渡してみても、その言語の音の体系を考えてみます。これが冒頭に説明したパロールからラングを見つける作業です。しかし、いきなり完全なラングを記述できることはまずありません。最初は間違いだらけです。調査して何年も経ってからようやく気づくこともあります。

ある程度音に関して整理がついたら、次の作業である文法調査に進みます。ターゲットにする文法項目を含んだ単語や短い文をインフォーマントに言ってもらいながら、意味の最小単位である形態素分析をします。少しずつ異なる文を言ってもらい、その違いを分析することで一つ一つの形態素を取り出し、その機能を見つけていくのです。この作業は、大学の演習でもたまにやりますが、パズルを解くような面白さがあり、かなり中毒性があります。最終目的はその言語の文法全体を記述することなのですが、無から創り出すことの喜びは、何物にも代え難いものがあります。

最近取り組んでいる研究の一つに、オモ系バスケト語の母語教材を作る試みがあります。言語学の研究成果を母語話者に還元することは、言語学者にとって極めて重要な仕事だと思います。文字の選定と正書法の決定から始まり、簡単な文法ハンドブックと単語、会話、例文集を作成し、バスケットにある複数の小学校に持っていき、授業で使ってもらっ

ています。今はその改訂版の作成に取り組んでいるところ。今はその改訂版の作成に取り組んでいるところ。今はその改訂版の作成に取り組んでいるところ。今はその改訂版の作成に取り組んでいるところ。

地球規模で起こっている言語交替

人類がことばを持つようになって10万年以上経つのですが、人類がアフリカ大陸を出て、南米の最南端まで到達した時の世界言語の数は、今とほとんど変わらなかったと考えられています。狩猟採集社会では、言語集団はそれほど大きくなく、どの言語集団も1万人規模だったのでしょう。そして何万年もの間に、多くの言語が生まれ、また静かに消えていきました。

しかし、ここ100年ぐらいの急速なグローバル化の流れの中で、人口が急増し、言語の世界の勢力図が大きく変わろうとしています。一部の超巨大言語がその勢力を増し、少数言語は隅に追いやられ、消滅の危機を迎えています。これは、人類が今まで経験しなかったことです。前述したアイヌ語や沖縄方言のようなことが、世界規模で起こっているのです。ある言語学者によれば、今話されている言語の90%が、近い将来地球上から消えてなくなると予想されています。いわゆる生物界の絶滅危惧種に相当することが、言語の世界でも起こっているのです。

言語が減ることに対して、人は鈍感になりがちです。言語がなくなるといっても、かつてのジェノサイド(大量虐殺)のように民族毎消滅するわけではないので、そこには錯覚が生じてしまうんですね。でも、話し手を失った時、言語は滅びてしまいます。

7,000の言語の多様性が仮に10分の1になってしまったなら、コミュニケーションは多少楽になるかもしれませんが、言語と一緒に大半の民族が持つ文化も永遠に失われてしまう可能性もあります。人類

理論と実践の融合による

総合的人間力の育成

教育学部では理科教育、その中でも化学分野を担当している和泉教授に教育現場での「理論」と「実践」の融合による教員養成の取組について語っていただきました。

みなさんは、「教師」という職業にどのようなイメージを持っていますか？

「教師」の仕事は、子ども達に勉強を教えることはもちろんですが、担任としてクラスをとりまとめたり、クラブ活動の指導をしたり、生活指導や進路指導、就職支援をしたりと、その役割は多岐にわたります。いじめや学級崩壊、教師の指導力不足を指摘する声など、教員を取り巻く環境は必ずしも穏やかではありません。それでも、依然として、将来つきたい職業として毎年上位にランキングされる子ども達の憧れの職業でもあります。

山口大学教育学部 教授

和泉 研二

Waizumi Kenji

1991年東北大学理学研究科博士課程後期
博士課程単位取得満期退学

1991年岡崎国立共同研究機構分子科学研究所
錯体化学実験施設技官

1993年山口大学教育学部講師 助教授を経て、
2005年より現職。

2011～2013年度まで教育学部附属光小学校校長

戦前・戦後の教員養成の違い

学校の先生になるのに一番オーソドックスな方法は、教育大学や教育学部で教員免許状を取得することですが、その他、文学部や理学部等、教育系以外の学部においても、教職課程が設けられていれば教員免許状の取得が可能です。戦前・戦中の教員養成は、「師範学校」という教員養成を専門とする学校を中心に行われていました。「師範学校」の教員養成にもそれなりの良さがあったと思いますが、型にはまった狭い範疇での偏った教育が行われ、民主性や多様性を欠いていたといわれています。

そこで戦後は、幅広い視野と高度の専門知識・技能を兼ね備えた人材を広く教育界に求めることを目的として、教員養成の教育は大学で行われることになりました(大学における教員養成の原則)。また、国・公・私立のいずれの大学・学部にもその門戸を開き、様々な教育観のもとで多彩な教員の養成を可能としたのです(開放性の教員養成の原則)。

教育学部教員の専門的な研究

教育学部は師範学校と同様教員養成を目的とするところですが、戦後の大学での教員養成の原則に沿って、教育学部の教員も大学の教員として、高度な専門性を求められることとなりました。教育学の分野についても勿論ですが、国語

や社会、理科、算数などの教科においても、文学部や理学部と同様、専門性をもった先生方が教育学部の教員となっており、それぞれの分野において専門的な研究も続けています。

私は、教育学部では理科教育、その中でも化学分野を担当していますが、研究としての専門は、結晶成長学や錯体化学、溶液化学になります。例えば、結晶や溶液のエックス線構造解析、インスリン溶液の光散乱実験などを行ってきました。インスリンの結晶核形成に対する微小重力の影響を調べるために、航空機を使って作り出した微小重力の中で実験をしたこともあります。

一見、小・中学校の理科教育とはあまり関係がないように思われるかもしれませんが、科学の発展は、教科書の中で止まっているわけではありません。例えばそれが初等・中等教育であっても、最新の科学の世界と完全に無関係でよいということはないでしょう。また、専門性を突き詰めていくことで、初めて実感として身につく科学的な見方・考え方、研究や思考の方法があることも、誰も否定できないでしょう。小学校や中学

校の教師といえども、いえ、教師だからこそ、それなりの専門性を身につけておくと同時に、専門性を突き詰めるという経験を通して、養っておくべき力があると考えています。



↑ 微小重力実験の様子。航空機の中で20秒ほど浮きます。それを一回のフライトで10回ほど繰り返し、その間に実験します。

教育現場での「理論」と「実践」の緊密な連携

私としては、小・中学校の先生方にも科学の専門知識や素養を身につけておいて欲しいのですが、教育実習での学生の授業の様子や、現場の先生方と接していくうちに、「学生や現場の先生方に自然科学の本質がキチンと伝わっているだろうか」、「学校の先生方は、伝えるべき教科書の内容を、自分の持っている専門的な知識の中でちゃんと咀嚼して融合させたうえで、子ども達に伝えているのだろうか」と疑問を持つようになってきました。大学で行った



”
大学と学校現場が
もっと緊密に連携し、
より良い教育を
目指すことが必要

授業は、学校現場で活かされているものと思っていたのですが、どうもうまく機能しているとは言えないようです。行っている本人たちも原理などはよく分かっていないのに、子どもたちに手品のようなことを見せるだけ、オモチャを作らせるだけで、「科学」と称しているイベントも見かけます。

一方、大学教員は、特定の分野に関する専門知識は持っていますが、学校現場における教育活動において何が問題になっているのか、よく分からないところがあります。私自身も、附属光小学校の校長を務めた経験から、大学教員はもっと学校現場に目を向ける必要があることを痛感しました。

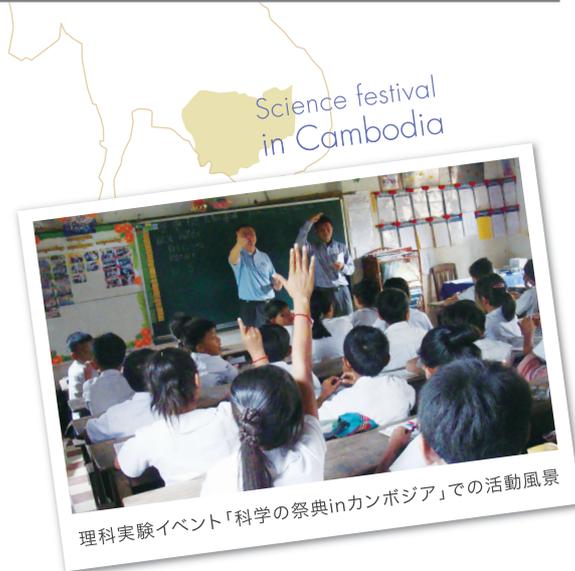
教育の現場では、よく「理論」と「実践」という言い方をします。おおざっぱに言えば、大学で勉強したことが「理論」で、学校現場で行われる教育活動が「実践」です。わかりやすい例えで、「理論」とは、正しい地図を作成、あるいは入手すること、「実践」とは、地図を頼りに実際に現地を歩くこと、と説明されることがあります。しかし、戦後の大学では、この地図作りがややもするとおろそかになっていたのではないかという趣旨の指摘が、様々な方向からなされるようになって来ました。これまでは、それぞれの大学教員が、高度な専門性の名の下、自分の専門の分野に関する部分的な地図のパーツを作って学生に渡すところまではするが、それらのパーツをうまくとりまとめて全体を調和させ、地図に仕上げる作業が学生任せになってしまっているという指摘です(これを予定調和論

といいます)。私自身そうであったと、感じています。一方、学校現場においても、地図を見ながら道を選ぶのではなく、昔の記憶や勘に頼って歩く方を好む傾向が強かったように思います。やはり、大学と現場が、理論と実践が、お互いに努力してもっと緊密に連携することで、より良い教育を目指すことが必要だろうと思っています。

「理科ちゃぶ」に関連した2つの事業

以前から、教育学部では「ちゃぶ台方式」による教員養成に取り組んできました。これは、学生、大学教員、現職教員、教育委員会担当者や地域の教育関係者が、それぞれの立場から、あるいは立場を越えて協働し、様々な教職体験、活動や省察を行うことにより、学校教育や教育事象の具体的な課題解決能力の育成を図ろうとするもので、理論と実践、大学と現場をもっと近づけようという、代表的な取組の一つと言えるでしょう。理科でも「理科ちゃぶ」として、毎年、現職教員の先生や理科教員志望の学生が参加する講習会や研修会を幾つか実施してきました。ここでは、「理科ちゃぶ」そのものではないですが、それに関連して最近始めた2つの事業を紹介します。

一つは、光小学校の校長時代にはじめた取り組みで、附属光小学校理科部を中核として立ち上げた「理科授業づくりの会」です。今年で3年目になるこの会は、主に光小学校の理科部の教員が、自ら研究開発した教材・教具等を使って行う講習



理科実験イベント「科学の祭典inカンボジア」での活動風景

会です。現職の小学校教員や教育学部の学生など、毎回十数名が参加して、年5～6回開催しています。会としてのポイントは、公立学校でも使えるニーズにあった教材であること、背景にある基礎的な原理や理論的な説明をおさえること、相互にコミュニケーションを図ることでさらに現場のニーズを掘り起こすことなどですが、個人的には学校現場の実践や課題を知るための良い機会となっています。

もうひとつ、平成20年から続けている「カンボジア王国における国際教育協力事業」について。もともとは、展途上国の学校教育や教員養成に関する支援活動を実施することをミッションに掲げた国際貢献事業としてスタートしたものです。教育学部の教員による現地調査や支援活動等が中心でしたが、この2月には、現地の小学校や教員養成学校などの協力を得て、理科教育選修の学生達が、理科実験イベント「科学の祭典inカンボジア」を実施するなど、学生達の教育実践の場としての役割を担うようになってきました。

教育学部では、平成27年4月に、「理論と実践の融合による総合的人間力の育成」を教育理念に掲げ、教員養成に特化した学部改組を予定しています。教育の分野における「理論」は、教科の基礎となる学問分野や教育学など専門諸科学の持つ「理論」や体系で止まっているは不十分です。常に、「理論」の先にある「実践」を見据えておく必要があります。地図のパーツを提示するだけでなく、学生と共に地図を作り、さらに、教職に就いた後も、「実践」の場において地図を更新し続けられるよう、学部の教育理念に沿って、個人的にも「理論と実践の融合」を目指し、小中学校の学校の先生や学生とともに、これまでの取組を充実させながら、さらに新たな取組にもチャレンジして行きたいと思っています。



↑ 小学校の理科部の教員が、自ら研究開発した教材・教具等を使って行う講習会の様子

グローバル化の光と影 誠実に向き合い未来を拓く

アンニョンハセヨ。冬ソナやK-pop
だけじゃない。お隣の国、韓国の若
者の生活や就職活動、労働問題を
身近に引き寄せ、比べてみて、自分
たちの今と未来を考えてみよう！

ソウル大学校社会科学大学大学院経済
学研究科に留学し、日本人として韓国語
で博士論文を書き博士号を取得した横田
伸子先生。堪能な語学力を活かして、研
究テーマである韓国の労働社会経済や
日韓の就業体制、社会政策の比較ジェン
ダー分析について韓国でのフィールド
ワークを活発に行っておられます。学生
に対しても、机上の空論、ネットで見た
バーチャルな知識だけに終わるのでは
なく、実際の交流を通して時代のリアル
な空気を体感するよう促すという横田
先生にお話を伺いました。

山口大学経済学部 教授

横田 伸子

Yokota Nobuko

1990年 津田塾大学国際関係学研究科
前期課程修了(国際学修士)

1993年 ソウル大学校社会科学大学経済学研究科
後期課程単位取得(経済学博士)

現在 山口大学経済学部 教授

著書に『韓国の都市下層と労働者—労働の非正規化を
中心に—』(ミネルヴァ書房、2012年、2012年度社会
政策学会奨励賞受賞)、『グローバル化とアジアの女性
労働と生活』(チャンジヨンと共編著、ハンウル、2007年、
2008年大韓民国学術院優秀学術図書選定)など。

韓国との出会い、 そして生活目線の韓国研究

大学生の時から、「^{ほんがん}漢江の奇跡」と呼ばれる韓国の経済発展と民主化運動に強い関心を持っていて、卒業論文も、1960年代から80年代の高度成長期に農村から都市に急速に流入してくる韓国の農民について書きました。でも、私が本当に韓国と出会ったのは、韓国政府の国費留学生としてソウル大学校社会科学大学大学院博士課程で勉強していた1990年12月から95年3月の約4年間だったと言えます。

1987年に民主化宣言されて間もない90年代前半の韓国は、真に民主主義的な成熟した市民社会を創り出そうという熱気と希望に溢れていて、その中心にいたのが私のような20代から30代の若者でした。一方、私は、学生運動が下火になった日本から来た留学生として、見るもの、聞くものすべてが新鮮で、社会変革を夢見る韓国のダイナミズムにあつという間に魅了されていったのです。

とはいえ、当時のソウル大学 社会科学大学院の留学生は私一人で、しかも、韓国を36年にわたって植民地支配した日本への反感から、韓国入学生徒の激しい敵意にさらされるのではないかと、留学当初はびくびくと常に身構えていました。しかし、私の心配はすぐに杞憂だとわかりました。韓国の大学や学界の若い世代は、1980年代まで軍事独裁政権下で禁じられていた社会変革のための学問を学びとろうと、外に向かって開かれていたからです。彼らは、日本を含む外国の学問研究から多くのことを吸収しようとし、私を共に学ぶ仲間として心から受け入れてくれたのです。この時の経験から、日本と韓国の若者同士が誠実に向き合えば、互いを理解することも不可能ではないと確信するようになりました。

また、私の研究者としての姿勢や社会を見る目は、この4年間の留学生活で培われました。私の研究スタイルも、韓国の研究者と問題意識を共有しながら、同時に日本人研究者として日本との比較の視点から韓国の社会経済を見ようとするものです。これは、単なる統計数字の羅列や分析にとどまらず、韓国の生活や文化、歴史の深みから人々の生きてきた軌跡それ自体を虚心坦懐に見つめ、洞察することなのです。



↑ 東アジア国際学術フォーラム「東アジアにおける格差拡大と諸問題」の様子

経済のグローバル化と格差社会

ところで、1990年代後半以降、日本と韓国の経済状況は、一見、明暗を分けているように映ります。日本は、90年代から続く「失われた30年」に突入しつつあるのに、韓国は、グローバル化の波にうまく乗って、FTA(自由貿易協定)を世界各国と結び、それを梃子に現代(ヒョンデ)や三星(サムソン)などの財閥系輸出企業は飛躍的に輸出を伸ばし、世界のトップ企業にのし上がりました。現代の自動車は全米カーオブザイヤーに選ばれ、三星の携帯電話、液晶テレビは世界を席卷する勢いですね。

1990年代末までは、経済的に韓国に追われる立場だった日本は、今度は韓国を見做って、アベノミクスでは「世界で一番企業が活躍しやすい国」を目指して、韓国のFTAばりにTPP交渉を推し進め、様々な規制緩和を断行しようとしています。とくに、労働者を整理解雇したり雇止めたり、正規雇用を非正規雇用置き換えたり、あるいは労働者の労働条件を引き下げたりするのを容易にする労働の規制緩和政策は、日韓両国で矢継ぎ早に取られてきました。この結果、日本と韓国では、派遣や請負労働者、有期雇用労働者などの非正規労働者がものすごい勢いで増えました。これらの非正規労働者の多くに共通して言えるのは、雇用が不安定で低賃金、様々な社会保障制度から

排除されていることです。こうして、経済状況は対照的に見える両国で、同じように労働の非正規化が進み、これが社会的格差の拡大をもたらしています。さらに、日本も韓国も非正規労働者が若者層と女性に集中していることが、労働の非正規化の共通の特徴です。ここから、若者や女性の貧困化が深刻な社会問題となっているのです。

ここまで授業で話すと、かなり多くの学生さんから、「グローバル化や規制緩和を今まで漠然といいことのように考えていましたが、じつは、労働の規制緩和は、企業がグローバル競争に勝つために、労働者を搾取し犠牲にするということだったのですかね?!!」というような感想が返ってきます。私はその通りだと思うのですが、それにしても、多くの若い人たちが、グローバル化や規制緩和をポジティブにとらえる言説に無意識に絡め取られていることに驚きを禁じ得ませんでした。

格差拡大と貧困の実態を えぐり出す日韓共同研究を!!

そこで、私は、日韓共通の労働の非正規化と格差社会の現実をえぐり出し、その影響を一番被っている若者たちの前に曝け出して見せることはできないものかと考えました。さらに、研究者の抽象的な言葉では、実際にある貧困や格差の実態を十分にとらえきれないことにも

気がつきました。いやむしろ、多くの研究者がその具体的な様相に関心がないのではと疑念を抱くほどでした。なかでも、東京と山口というように、地域によって、貧困や格差の在り様が全く異なるという気づきは私にとって重要でした。

このように向かうべき目標が明確になると、私がかつて韓国の大学院でともに机を並べ、今は、韓国の大学で労働社会学や経済史を教えている友人たちのことを思い出しました。彼女たちなら私と問題意識を共有し、一緒に日本と韓国社会に対して問題提起をしてくれるのではないかと期待したのです。そして、思い通り、韓国 梨花女子大学校社会学科の「非正規労働者の社会権獲得へのhighroad」研究チームと日韓共同研究を立ち上げることになりました。この共同研究を支えてくれているのが山口大学 重点連携大学プロジェクトです。

まず、梨花女子大学校との重点連携大学プロジェクト「日本と韓国における労働の非正規化と社会的格差拡大に関する共同研究」のキックオフを告げるために、今年3月1日に「非正規労働者と貧困問題」日韓フォーラムを山口大学で開催しました。とりわけ、このフォーラムでは、日韓の貧困や社会的格差の実態を明らかにするだけでなく、これらの問題に対して地域社会や市民運動、労働者がどのように対応し、社会に訴えているのかにも照明を当て、解決の糸口を探ろうとしたのです。

例えば、2008年のリーマンショックで派遣切りに遭ったマツダ自動車の元派遣労働者が、正社員としての身分の確認を求めて山口地方裁判所に提訴しました。フォーラムでは、その労働側弁護団と原告団の方々にも来ていただき、派遣労働者がどういう扱いを受けてきたのか、彼らがどのように裁判の勝訴を手繰り寄せ、とくに地域社会がそれをどんなふうを支



えたのかについて具体的に話していただきました。また、韓国の造船企業で「非正規労働の撤廃」を訴えて、造船用のクレーンに登り300日余りの籠城をした労働者 キムジンスクさんの闘いを描いたドキュメンタリー映画も上映しました。彼女を応援しようと、韓国全国から著名、無名を問わず、たくさんの市民がバスを連ねて釜山の籠城現場に集結しました。このバスにつけられた名前が「希望のバス」というのは印象的ですね。

フォーラム当日には、生憎の雨模様の中、山口だけでなく、福岡や大阪、東京からも80人余

りの方が参加して下さり、山口大学会館の会議室では立ち見が出るほどでした。参加者の皆さんは、研究者の報告だけでなく現場の人々の声に熱心に耳を傾け、多くの意見や質問を寄せてくださいました。このように、山口という地域で、日韓の研究者や労働者、市民、学生が交流し、私達が生きる格差社会の実際を知ることで、この問題を自分自身に引きつけて考えてもらえればと願っています。とくに、学生さんには、自分にも起こりうることとして、目を逸らさず主体的に向き合い、将来に「希望」の持てる社会、憲法に保障された、すべての人が「健康で文化的な生活」をおくれる社会を創り出すにはどうしたらよいかを考える契機となればと思います。

今後、私達の日韓共同研究は、地域に生きる人々の生活目線からどんどん実態調査を行っていくつもりです。そして、その結果を市民や学生の皆さんと共有し、新たな社会のしゅみを生み出す一助となればと願ってやみません。

日韓国交正常化 50周年に向けて

さて、来年2015年は、日韓国交正常化50周年となる、文字通り節目の年です。私たちは、山口大学大学院東アジア研究科を中心に、この記念すべき年に、学生や市民も巻き込んだ日韓国交正常化50周年記念シンポジウムを企画しています。日韓の人々の暮らしや文化、歴史に根ざしたコンセプトを盛り込んだものにするつもりです。日韓の政治的対立や、日韓双方に横たわる偏狭なナショナリズムを超えて、豊かで建設的な日韓関係を築いていくためには、現在も、これから若者や市民が主役にならなければならないと考えています。



1 塩花の木 金鎮淑 著

309日間クレーンに立て籠もり、整理解雇の撤回を求めた金鎮淑。彼女を応援しようと、希望のバスに乗った数万人の市民がつくりだした奇跡。



2 韓国の都市下層と労働者 横田伸子 著

経済発展とともに、韓国の労働社会がどのように変化したかを、生産労働者の労働市場構造の分析を中心に歴史的に跡づけ、その特徴や意味を明らかにした一冊。



生物の本質を 多彩な視点で紐解く

単独の学問分野では解決が困難な課題を解決する手段として、伝統的な学問領域の枠組みを越えた、学際的な視点に立った研究※が進められています。伝統的な生物学の手法ではなく、物理学やロボティクスといった新たな切り口で、生物の運動メカニズムや運動のコツなどについて研究を行っている西井教授にお話をうかがいました。

※二つ以上の学問分野を統合して横断的に進めていく研究

山口大学理学部 教授

西井 淳

Nishii jun

1992年 東京大学工学部助手
1993年 東京大学大学院工学系研究科助手
1996年 理化学研究所基礎科学特別研究員
1999年 山口大学理学部助教授
2006年 山口大学大学院理工学研究科助教授
2007年 山口大学大学院理工学研究科准教授
2010年 山口大学大学院理工学研究科教授

生命の誕生は物理現象の一つ 生物と物理がつながった瞬間

学生時代から物理が好きでいろいろな本を読んできました。その中に「エントロピーは増大する」という言葉を見つけました。例えば、水の中にインクのしずくを一滴たらすと、インクはどんどん拡散して、最後には水と混ざってしまいますよね。逆に、拡散してしまったインクが一方所に集まり、凝縮して再びインクのしずくができることはありません。世の中で起こる自然現象は、時間の経過とともに、エントロピーが小さい方から大きい方へ、秩序から無秩序の方向へと移行するわけです。ところがある時、太古の海のなかに漂っていた物質が集まって最初の生命が誕生した…そんなイメージがふと頭の中をよぎりました。つまり、生命の誕生は、このエントロピー増大の法則に反する現象といえます。しかし、生命の誕生は物理現象の一つなのだから、物理的に説明できるはず。そう考えると非常に面白いなと感じました。それまでの私の頭の中では、生物学と物理学は完全に分離していたのですが、ここでつながったのです。この気づきがきっかけとなって、生物を理論的な視点で研究してみたいと思うようになりました。後になって調べてみると、このアプローチでの研究はたくさん行われていたのですが、当時の自分にはそうした知識がなかったので、何かものすごい事を発見したような気になっていたんですね。

脳とコンピューターは似ている 情報科学からのアプローチ

もう一つ、コンピューターでプログラムを組んでいたときに気づいたエピソードがあります。それは、ヒトの脳とコンピューターが似ているということです。コンピューターは、外部からの

入力情報を内部で変換、加工して、その結果を画面に出力しますよね。一方、ヒトの脳は、全身にあるセンサーからの入力を変換、加工して、全身の筋肉に出力しています。つまり、コンピューターも、脳も、入力を加工して出力する装置である点では似ているわけです。先程と同様に、私の頭の中では、生物学とコンピューターも分離していたのですが、この気づきによって、生物学と情報科学も、実はつながる話ではないかと考えるようになりました。

工学部、理学部生物学科を経て 生物を研究対象に

こうした2つの体験が強く心に残り、生物を対象にした研究に取り組もうと考えました。ただし、生物を伝統的な生物学の手法で研究するのではなく、生物をロボットのようにみなして物理学、もしくは情報科学やシステム科学の視点から研究すれば、新たな発見ができるに違いないと考えたのです。

しかし、私自身は、生物実験の経験が少なかったため、実際の生物に触ってみることも必要だろうと考え、工学部を卒業後、理学部生物

学科に学士入学して、3、4年生をやりなおしました。その後、システム概念を意識して生物を研究するには、やはり工学系が向いているだろうと考え、大学院は工学系に進みました。博士号は工学ですが、研究対象はずっと生物です。ですから、「どんな研究をされていますか」と聞かれると、いつも困ってしまうんです。生物と言いきると誤解される気がしますし、ロボットかというとうそでもない。生物を研究するには、生物も、ロボットのしくみも知っておいた方が良さそうだと考えたわけです。やりたいことを考えたとき、大学のしくみとしては分野が細分化されていたから、自分としては両方学ぶ必要があったんですね。

身体と脳のリズムが同期する 生物の運動メカニズムについて

研究では、脳がどのようなメカニズムで学習を行っているのかを理論的に考察したり、運動メカニズムについてコンピューターを用いて解析したりしています。

まず取り組んだのは、生物の運動学習のしくみについての研究です。当初、運動を行う際には、脳が絶えず信号を出して筋肉を動かしているイメージを持っていたのですが、調べてみると、脳と身体が一体となっておきるものだということが分かってきました。どうしたことかという、身体のもっている物理的特性を上手にいかして、それを助けるように脳が最適なタイミングで信号を出しているということです。アキレス腱というバネを上手に使えば身体はボールのように弾みますし、ヒトが歩くときには

” 異分野への理解と
仮説形成が学びのコツ “



足が振り子のように自然にゆれる周期で歩くのが楽なはず。こうした物理的に生じる運動に委ねて、あるポイントで脳が指令を出すことでラクな運動を実現しているんです。脳の学習についてはいろいろな種類がありますが、少なくとも身体を動かす運動に関しては、身体の物理特性をできるだけ活用することで脳はなるべくさぼろうとしているようにも感じられます。

馬や昆虫などの多足動物は歩く速さに応じて足を動かす順番を変えます。その理由をロボティクスの手法を用いて調べてみました。コンピューター上でロボットを設計して、いろいろな歩き方をシミュレートし、それぞれの速度で一番ラクな歩き方を計算した結果、ラクな歩き方は実際の動物の歩き方と同様に、ある速度で非連続に変化することが分かりました。楽に歩くには身体の物理特性を上手に利用する必要がありますから、身体の構造によって決まる足を動かす順番があり、脳はそれをうまく利用して歩行を実現していると考えられます。

運動のコツを科学的に解明

ここ数年の研究で見えてきたことは、生物は目的の運動を達成するためのポイントを本能や学習により知っており、脳はそこにエネルギーを注入しているということです。俗にコツとかツボとかと呼ばれるものです。例えば、ヒトが歩く場合、こげにくくなるコツを脳が知っていて、そこに注意を払っているらしいのです。

ロシアの運動生理学者、ペルンシュタインは熟練した鍛冶屋の運動を計測して、「熟練工の鎚は正確に狙った位置を打つが、腕の運動軌道は毎回異なる」ということを発見しました。そこで、彼は二つの面白い考察をしています。一つ目は、脳は注意をはらっているところと、そうでないところがあること。二つ目は、脳は全身にあるたくさんの関節を臨機応変にうまく活用して、そのときそのときの身体の状態にあわせて目的を達成していること。

このことを先程の話と組み合わせると、運動のコツの解明につながるのではないかと考えています。いわゆる暗黙知と言われますが、スポーツが得意な人は無意識にそれを獲得している人が多いですね。その暗黙知を情報科学や物理学の力を用いてあぶり出すことができると考え、現在、歩行のコツやさまざまな

スポーツのコツを探っています。

感動を求めて サイエンスは生まれる

脳のしくみの中でも、とても不思議だと感じているのが「感動」という現象です。すごいことを見つけた、すごい絵を見た、すごい文章が書けたとか、感動体験はものすごい原動力になったり、学習やその後の考え方に大きな影響を与えたりしますよね。ものすごく大事な要素だと思うのですが、ヒトが進化する過程でなぜ感動するようになったのか、なぜ感動というものが意識のなかに存在するのか、そういったことを理論的に説明するためにはどうすればいいのか、最終的にはそういったことも突き詰めていきたいと考えています。

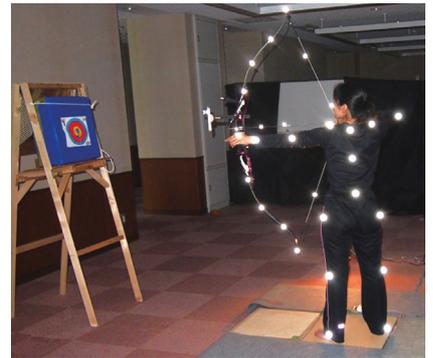
答えのない答えを導くため すべては仮説形成からはじまる

実は、推論の基本としてよく知られている三段論法で説明できることはかなり限られています。真であると認める大前提がない限り何も示せないですし、また、前提をこえたものは何も生み出すことはできません。ですから、サイエンスの世界では仮説形成などの、三段論法ではない推論の方がはるかに大切なんです。

例えば、草藪をつついたらヘビがでてきた、故に「草藪にはヘビがいる」という仮説を立てたとします。それはたまたまそこにヘビがいただけかもしれません。でも、「広場に比べて草藪にはヘビがいる確率が高い」と言い直せばヘビの習性の理解につながる検証可能な仮説になります。

スポーツの世界や音楽の世界でも同じことが言えますよね。こうすれば勝てるのではないか、こうすれば皆が感動してくれるのではないか、これらもすべて仮説形成です。もちろん、社会人になってからも必要とされる能力です。商品を開発する際に「これは売れると思います」と言っても、誰も真実は分からないわけです。真実が分からないところで、商品をたくさん売る方法についての仮説を考え、それが正しいと思う理由を10個挙げられる。そこには三段論法的ではない、ロジカルな推論の仕方が存在します。

仮説を立てる力は、たいていの人々が持っています。それを楽しくサイエンスの世界で使えば、より多くの可能性を検討できますよね。



↑ スポーツ選手の運動解析

間違えているかもしれないということを恐れずに、答えを導き出そうとするところに、サイエンスの楽しさがあるのだと思います。

物事を突き進めるコツは 幅広い知識と手法の獲得

観察データに基づいて、さまざまな仮説を立て、その妥当性を示すためには、しばしば異分野に対する理解も必要です。真理を探究するためには単独分野での研究では不十分なことの方がむしろ多いかもしれません。私は、生物の運動や行動を、物理学や情報科学、ロボティクスの手法などを用いて解析することでいろいろな発見をしているのですが、学生の皆さんにもこうしたいろいろなアプローチの仕方ができることを知ってほしいです。

面白いと思ったことに執着して、とことん突き詰めるのは大切なことだと思います。一方で、それをうまく突き進めるためには、執着していないことも必要ではないかと思います。時々、大学で勉強したことは社会に出ると役に立たないという人がいますが、学生時代には無目的に手段を身につけることも必要です。多くの手段を知っていることで、何かをやりたいと思った時にその中から最適な一つの手段を選ぶことができます。最終的に使う武器は一つかもしれないけれど、使える武器は多いほどいいですね。これが好きだからこれしかやらないというのではなく、いろいろな経験を積んでほしいですね。

覚えることだけが大学の勉強ではありません。疑問をもつ、考える、反論してみる…いろいろな手法で答えを導き出そうとするところに学問の面白さがあります。皆さんも私と一緒にサイエンスの面白さを探求してみませんか。

図書館の学生協働活動について

図書館の学生協働とは、図書館職員と協働し、図書館のサービスの向上・環境改善などを目的として活動している学生グループです。参加学生たちが、この活動を通してコミュニケーション能力、企画力及び実行力という社会人として必須な力を養うこと、社会人の先輩である図書館職員とともに活動することで、勤労観や就業観を養い、キャリア形成支援を行うことも、この取組の目的のひとつです。平成18年、吉田キャンパス総合図書館において、人文学部図書館司書課程の学生10名から始まった活動も、今年で8年目を迎えます。数年前から医学部図書館でも活発となり、今年度後期からは工学部図書館においても本格的に始動する予定です。

図書館で行われている、様々な取り組み

1 ピアサポート

(学生による学生の支援)

カウンター及びPCサポートコーナー等で図書館の利用方法や資料の探し方など情報利活用の支援を行います。新入生オリエンテーションや図書館ガイダンスのお手伝いもしています。



カウンターでは、貸出返却のほか利用者からの様々な質問に対応します。



新入生オリエンテーションで、1年生に図書館の使い方を説明しています。

2 キャリア教育支援

日々の活動が、社会人基礎力の養成につながります。月例会の開催や業務日誌などの報告により、学生スタッフと職員の意味疎通がはかられています。学生のスキルアップの向上をめざし、教職員による講習会が実施されることもあります。



月例の打合せ会。活動報告や活動を通して感じていることなど意見交換を行います。



新人スタッフの研修は、先輩がプログラムを作成し、授業の合間に後輩を指導します。

3 図書館サービスの向上

学生の視点から発案し、職員と協力してさまざまな活動を実施しています。



【企画展示ワーキンググループ】
テーマを決めて本を紹介します。



【就活コーナーワーキンググループ】
キャリア本の選書やポップによる紹介をします。



【破損本修理ワーキンググループ】
破損した本を修理します。



【医学部図書館】
医学学習に有効なDVD教材の試聴版や内容紹介ポスターを作成して、利用を促進しています。

4 他大学との交流と情報共有

同様の活動を展開している他大学の学生交流と活動情報を共有することを目的として、平成23年度から大学図書館学生協働交流シンポジウムを実施しています。今年度は8月21日～22日に本学を会場として開催し、全国の国公立28大学から約140名の学生及び教職員が集い、交流を深めました。(主催：島根大学、島根県立大学、梅光学院大学、山口大学)



ポスターセッションで発表中



ワールドカフェで意見交換中

なお、図書館における本学の学生協働及び学生のカフェ運営等の活動について、文部科学省のホームページ「大学図書館における先進的な取り組みの実践例(Web版)」において紹介されています。

アドレス：http://www.mext.go.jp/a_menu/kaihatu/jouhou/1341375.htm

強豪フットサル部を紹介!

多くの大学に存在するフットサルクラブ。その中でも、山口大学のフットサル部は、4年連続で全国大会に出場していることを皆さんは知っていますか? (2011年、2013年は全国3位!) 今回は、そんな強豪フットサル部を取材。日本一を目指し、全力でフットサルに取り組む彼らの思いを聞いてきました。

■フットサル部の活動について

山口大学フットサル部は現在選手25名、マネージャー4名で活動しています。練習は週3日、大学内にある第1体育館で行っており、練習メニューはメンバー全員で話し合って決めています。練習では、1つ1つのメニューに目的を持たせる事を意識して取り組んでいます。また、学生のリーグと社会人のリーグの2つのフットサルリーグに所属しており、多くの実戦経験を積んでいます。フットサル以外にも、メンバーの自宅でたこ焼きパーティを開催するなど、メンバー同士の仲が良い部活です。

■サークル選抜チームから部活昇格へ

元々、山口大学にあるいくつかのフットサルサークルの中から、実力のある選手を集めて、選抜チームという形で活動していました。そして、2011年には全日本大学フットサル大会という大学フットサルの全国大会に初出場し、3位という成績を収め、翌2012年にも2年連続で全国大会出場を果たしました。その実績が評価され、2013年に部活に昇格し「フットサル部」となりました。サークルから部活に昇格してあまり年月が経っていないため、まだ「山口大学フットサル部」の存在が周囲にあまり知られていないというを感じています。今後、フットサル部の存在を知ってもらい、たくさんの部員が入部してくれるといいなと思っています。



集合写真。全国制覇という目標に向かって全員・マネージャー一丸となって戦っている。



練習の光景。学年に関係なく、アイデアや意見を出し合って練習している。

■活動の楽しさ・難しさ

フットサルはサッカーとは異なり、大学から始める人が多いスポーツです。また、ボールの大きさやルール等、サッカーとは異なる点がいくつもあります。そのため、サッカー経験者でも、初めは先輩達のレベルに付いていくことができず、上手いかない事に落ち込む時もあります。しかし、先輩達が優しく指導してくれるので、自分がどんどん上手くなっていることを実感することができます。また、部員全員が「全国制覇したい」という熱い思いを持ってフットサルに取り組んでいるので、その真剣な雰囲気の中でプレーすることができるのはとても楽しいです。

■この記事を読んでいる高校生のみなさんへ

高校までの部活動では、上を目指して本気で取り組んでいる人が多いと思いますが、大学生の課外活動になると、そんなに本気で取り組むのではなく、遊びくらいの気持ちで気軽に楽しめればいいや、と考える人も多くなるかと思いますが、社会人になると、何かに本気になれる機会はもっと少なくなり、本気で上を目指して取り組むことができるのは、やっぱり大学が最後ではないかと思っています。大学でも日本一を目指したいと思う人、高いレベルで戦いたいと思う人は、ぜひフットサル部に入ってください!

姫山祭を間近に控える実委を直撃!

毎年11月初めに開催される姫山祭は、学生によるコンテストや豪華ゲストの登場等、楽しい企画が盛りだくさん! 山大的冬を代表するイベントとなっています。そんな姫山祭を企画・運営しているのは山口大学大学祭実行委員会(通称:実委)です。今年で65回目を迎える姫山祭に対する意気込み、そして今年の姫山祭の最新情報について、実委の皆さんに聞いてきました。

■大学祭実行委員会の活動について

大学祭実行委員会は1、2年生45人を中心に活動している団体で、毎年11月に行われる大学祭「姫山祭」と4月に行われるサークル勧誘イベント「新入生歓迎フェスティバル」の企画・運営を行っています。活動は基本的に毎週木曜日に行っていますが、9月からはほぼ毎日活動を行い、11月3日(月・祝)に行われる第65回姫山祭に向けて、企画・準備を行っています。

■大学祭を成功させることで得られる達成感が良い

大学祭に関する業務は幅広く、決して楽しいことばかりではありません。それでも、なぜ彼らは実委で活動しているのでしょうか。実委の姫山祭に対する思いを委員長である矢田悠輔さん(人文学部2年生)に伺いました。

「メンバーそれぞれが「より良い大学祭を作りたい」という熱い思いを持って実委に入部しているので、時には考えがぶつかることもあります。しかし、みんなが1つになり、姫山祭を成功させることができるとやはり嬉しく、すごく達成感があります。」

今年の姫山祭は「伝統の65(むごう)へ」をテーマとしています。今までの姫山祭の伝統の中でも、良いものは伸ばし、悪いものは断ち切ることで、今までよりもさらに楽しい大学祭にしようと一緒に団結して準備に励んでいます!」



↑ 昨年度の姫山祭の様子。昨年度の姫山祭は天候に恵まれなかったが、多くの人で賑わった。

■第65回姫山祭の最新情報

今年はじゃんけん大会や炭酸ジュース早飲み大会、カラオケ大会や女装コンテスト等、主に1年生メンバーを中心に企画された面白いイベントをたくさん用意しています。今年度の姫山祭では、ほとんどの企画で参加規制を設けていないので、山大学生のみならず、子供からお年寄りまで幅広い年齢層の人達に楽しんでもらえたいと思います。また、今年は特別ゲストとして、「青いベンチ」等のヒット曲で知られる男性音楽デュオ「サスケ」さんをお招きすることが決定しています。人気のあるアーティストによるライブパフォーマンスで姫山祭を更に盛り上げます。

■この記事を読んでいる高校生のみなさんへ

最後に、本記事を読んでいる高校生へのメッセージを、実委を代表して矢田委員長から頂きました。

「姫山祭に来れば、何か得るものがあるはずなので、ぜひ一度来ていただいて、姫山祭の雰囲気を感じてもらいたいと思います。」

実委の活動では、大きなイベントの企画やお金の管理、タレント事務所との連絡・調整など、普通のサークルでは体験できないものをたくさん味わえます。自分の将来の幅を広げる1つの選択肢として、実委で活動してくれると嬉しいと思います!」

↓ パンフレット制作の光景。去年のものを参考にしながら、より良いデザインを考えている。



← 各企業へ配布する資料のチェック。プリントにミスが無いよう、入念な確認が行われている。

↓ 立て看板制作の光景。全て学生の手作り!



Qを解く9番目の新学部

国際総合 科学部

《設置計画書提出中》

国際総合科学部 国際総合科学科 (1学部1学科)

■開設時期:平成27年(2015年)4月 ■学生数:1学年 100名

課題解決のチーム作りのプロフェッショナル、デザイン思考を実践するコーディネーターを育てる9番目の学部、国際総合科学部が、山口大学創基200周年の2015年に誕生します。時代の要請をいち早く反映させ、地域に密着した文理融合の教育を行う新学部について、設置準備委員会の委員長である、教育学部の糸長雅弘教授にお話を伺いました。

新しい価値を生みだす！ デザイン思考で社会をより良いものにする

今の社会が求める人材、デザイン思考を実践するコーディネーター

企業が求めている人材の能力を調査してみると、一番必要とされたのは、「コミュニケーション能力」で、その次に「課題解決能力」でした。もちろん「専門性」も求められますが、優先順位は高くありませんでした。

国際総合科学部では、そのような社会のニーズに応えるため、専門性に特化しない代わりに、コミュニケーション能力と課題解決能力それに文理融合的な幅広い学識を身につけ、それら学識の結びつけ方を学び、デザインの中でモノ作りや仕組み作りをするチームをコーディネートできる人材の育成を目指します。

本学部が育成する人材は、実社会に存在する課題について、デザインの思考と方法により様々な分野や国籍にまたがる人々のアイデアや意見、考えを調整し、チームとしてひとつにまとめ上げ(coordinate)て課題解決に導く、まさに今の社会が求めるグローバル人材です。

デザインの理論と方法論とを 探求する、デザイン科学

国際総合科学部は、デザイン科学に基づく学部です。一般には、自然科学に代表されるような「あるものの探

究」を行う科学を「認識科学」と呼ぶのに対し、「あるべきものの探求」を行う科学を「デザイン科学」と呼んでいます。デザインの理論と方法論とを探求する学際的*な学問が「デザイン科学」ですが、国際総合科学部では、この「デザイン科学」をより具体的に、「デザイン思考などの手法に基づき、課題を解決したり、創造的な方法で社会に新たな価値を提供したりするためのプロセスを設計・構築して、実践するとともに、課題解決のためのチームにおいて様々な系統的知識や情報を用いながら、分野や国籍の異なる人々の多様なアイデアや意見、考えを調整し、一つにまとめ上げることでできる人材を養成することを目的として行う教育・研究の営みである」と捉えています。

ここで、「デザイン」という言葉ですが、これは現状をより良い状態に変える行為全般のことであり、新しい仕組みや制度、モノを生み出すことによって現代社会や企業等の組織が抱える諸課題を解決したり、創造的な方法で社会に新たな価値を提供したりといった、必ずしも形を有しないものまでも含む非常に広い概念を表すものです。そして、デザインの代表的な方法論が「デザイン思考」と呼ばれるものですが、この方法論には、山口大学の教育理念に含まれる「発見し・はぐみ・かたちにする」という行為に相通ずるものがあります。

*学際的とは研究が幾つかの分野にまたがって行われること



スタンフォード大学で行われている「D-スクール*」では、課題解決のためのデザイン思考における5つのプロセスを明確にしています。

デザイン思考

[スタンフォード大学での場合]

1: empathy

課題の対象に感情移入する

2: define

問題を定義する

3: ideate

アイデアをたくさん出す

4: prototype

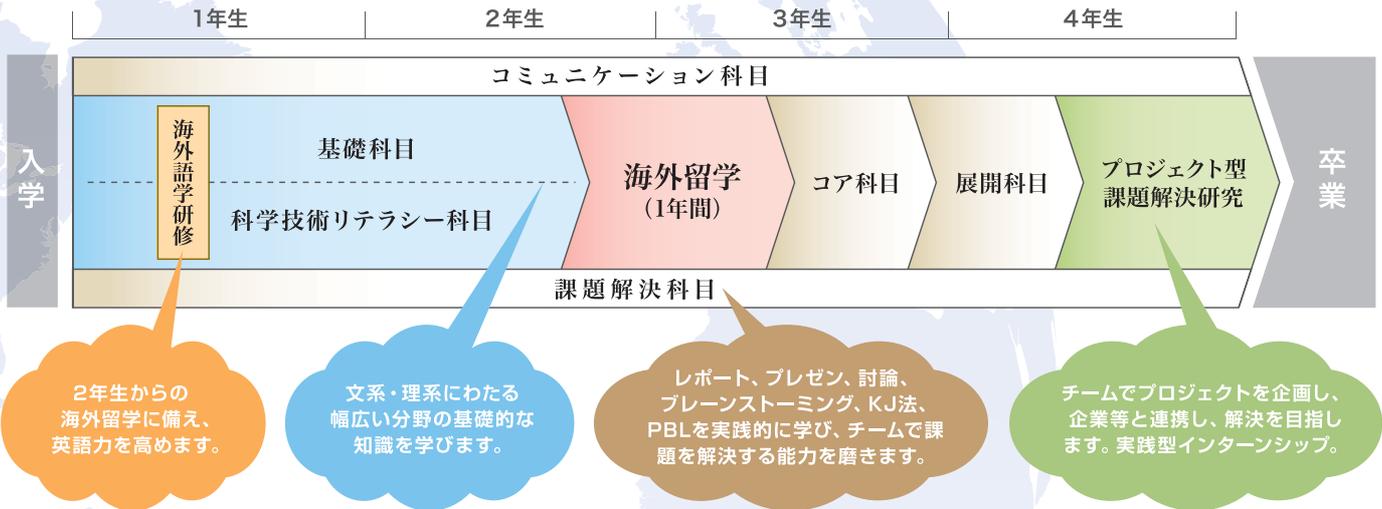
プロトタイプを作る

5: test

試験し、フィードバックを得る

* 機械工学、コンピュータサイエンス、ビジネス、法律、文学など様々な専攻の学生や教職員が集まり、分野を越えたイノベーションを生み出す力を身につけていく学科横断型プログラムのこと

《 国際総合科学部のカリキュラム概念図 》



特色あるカリキュラム

デザイン思考を実践するコーディネーターの基盤を育成するためのカリキュラムには、2つの大きな特徴があります。

特徴1：一年間の海外留学

時代が求めるグローバルな人材となるための第一歩として、1年生の夏には1カ月間、フィリピンセブ島にあるアイデア・イングリッシュ・アカデミーで語学研修を受けます。平日は朝から晩までみっちり英語漬けになります。目標はTOEIC600点以上です。2年生の秋から3年生の夏までは、1年間の海外留学を経験してもらいます。ここでは留学先の文化・歴史を学び、英語圏以外では現地の言葉にも親しんで、コミュニケーションスキルを身につけてもらいます。

帰国後には、山口大学において英語による講

義を受け、継続した英語能力の向上を図ります。

この留学は交換留学です。つまり1学年100名が留学中は、同じ100名が留學生であるため日常的に異文化交流ができます。卒業時のTOEICスコア900点以上を目指し、730点以上を取得します。

特徴2：日本を学び、地域・社会に密着した授業科目

グローバルな環境で活躍するために必要な知識のひとつは、自分の国である日本に関する知識です。世界を知るために日本を知る必要があるのです。日本に関する知識は、留学先でも必ず求められます。日本の思想・文化や政治・経済まで、日本語と英語の両方で授業が行われます。

地域の課題に取り組むための重要な授業科目に、「地域理解・連携演習Ⅰ、Ⅱ」があります。

また、4年次に一年間に渡って学生が取り組む「プロジェクト型課題解決研究」のプロジェクトは、学生達が自ら考えるものや企業の提案に従って行うものなどを数多く用意していきます。特に企業提案型の場合は、1年間のインターンシップも兼ねたものになります。県内外の企業から、一緒に行いましょうという申し出が数多く来ています。

受験生の皆さんへ

来年4月に開設予定の国際総合科学部は、文理融合の学部のため文系理系の枠にとらわれず門戸を広く開けています。企業の求めているコミュニケーション能力と課題解決能力それに幅広い学識を兼ね備えた人材育成を目指す新学部に興味のある方は、是非チャレンジしてみませんか。

今回お話を伺った、本学部設置準備委員会委員長の糸長教授です

Profile

山口大学 学長特命補佐
大学教育センター長

糸長 雅弘 Masahiro Itonaga

理学博士。教育学部理科教育講座に所属。これまで、磁気圏物理学の研究を行う。現在は数学・理科教育におけるコンピュータの活用法並びに情報セキュリティ及び情報モラルに関する研究にも力を注いでいる。



>> 国際総合科学部の詳細はここでCHECK!

山口大学 国際総合科学部

検索

※平成27年4月に予定されている新学部「国際総合科学部」の設置、「教育学部」及び「経済学部」の改組の計画は、文部科学省大学設置・学校法人審議会の審査結果によって確定するものであり、変更があり得ます。内容については、本学ホームページ、「入学者選抜要項」及び「一般入試学生募集要項(11月中旬公表予定)」で必ず確認してください。



File#

02

河村 龍弐 さん

教育学博士

- 昭和30年
山口大学教育学部光分校卒業
卒業後、光市内の小学校に教諭として勤務
- 昭和36年～40年
山口大学教育学部附属光小学校 教諭
- 昭和62年～平成元年
山口大学教育学部附属光小学校 副校長
- 平成7年
退職 退職後、光市福祉協議会コーディネーター
九州女子大学・九州女子短期大学講師
YIC医療福祉専門学校講師(現職)歴任

附属光小学校で、「理論」に接する機会が多い環境に恵まれたことは、私にとって幸運だったと思います。その後、通信教育、修士課程、博士課程と、徐々にステップアップしながら、学び直しを行うことで、長い教師生活の中、ゆっくりと、「理論」と「実践」が自分の中で自己統合していったように思います。それは楕円の二つの中心のように、理論が実践を深化させ、優れた実践が理論をゆさぶり新しい視点を拓くのです。

私が教育現場にいたのは、昭和30年からのおよそ40年間です。その間の日本は、まさに激動の時代でした。戦後の物のない疲弊した時代から急速な科学技術の発展、高度成長期を経て豊かな成熟社会へと、著しく変化していきました。これに呼応するように、この間、ほぼ10年おきに学習指導要領が改訂されています。同時期に現場にいた同僚達の中には、政策の変更に翻弄され、やらされてばかりの苦勞の多い時代だったと愚痴をこぼす者もいました。ですが、私は、逆に、主体性を持って新しい教育を創り上げていくことができる、今までにない、変化に富んだやりがいのある楽しい時代だったと思っています。

私は、教師とは「愛の行者」であると、自らに言い聞かせています。教育学を書籍で学ぶことは大切ですが、まず心が先になればなりません。教師を目指す学生は、教育実習や子どもの観察を通じて、他の職業を目指す者に先駆けて愛に触れることが出来ます。愛に触れることで、人間は深まっていきます。人間を学び、人間を教える。これは、振り返れば自分で自分を教育していくことにもつながるのです。

医師の仕事が人の体を健全にすることで

昭和24年の大学発足当初、教育学部は、山口市内にある本校の他、光市と防府市にも分校がありました。私が入学したのは、光分校です。

新制大学になって間もなくのことです。教育学部は、これまでの師範学校の体質と大学への夢とが交錯する、新しい時代への過渡期にありました。

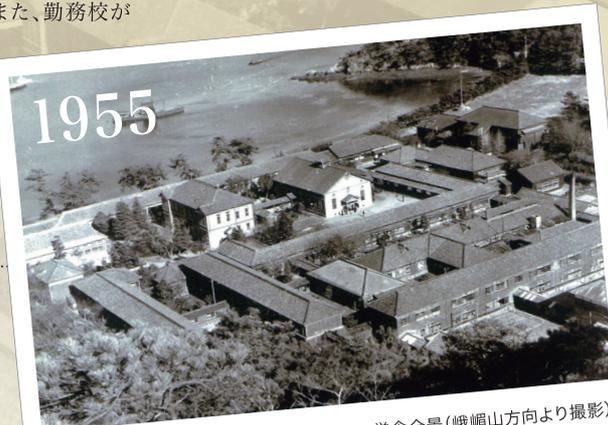
教育学部には、師範学校時代からの教授・助教授もたくさん残っておられました。師範学校は、教員を養成するための専門的教育機関で大学ではありません。師範からの先生方は、ともすれば実践重視で、教育探求よりも技術的な見地が先行しておられたように思います。

他方、師範学校が大学に昇格したことにより新たに採用された先生もおられました。若い助教授クラスの先生方は、学徒出陣され戦後復学、更に奨学金でアメリカに留学された方々です。豊かで明るいアメリカで、当時最先端の教育学を学び、荒廃した日本の国土に民主的な教育を根付かせようと、やる気に立ち満ちておられました。最新の教育理論の原書を片手に板書される姿が印象的に残っています。

私の教育者としての原点は、腕白な少年時代にあります。物のない時代に野山で遊ぶ中で、自然に親しみ動植物とふれあう心を育んだことが、合自然の全人教育の本筋に重なったのだと思います。大学で教育史や教育学といった「理論」に出会ったことで、それらはより確かなものになりました。また、勤務校が

Then & Now 【昔と今】

昭和30年の教育学部光分校(写真左)。現在の山口大学教育学部附属光小中学校(写真右)のグラウンドがある海際まで校舎が建ち並んでいました。



1955
御手洗湾・象鼻ヶ岬を背に...学舎全景(峨嵋山方向より撮影)



Now
現在、跡地に建つ山口大学教育学部附属光小中学校

あれば、教師の仕事は、人の心を健全にして、学力を高め生きる力を育てることです。教師は、その困難さを身をもって体験しながら、人を愛することの喜びの中で生きることが出来ます。確かに大変なことも多いですが、この上なく魅力的な尊い仕事だと思います。

大学の授業や、学生生活、社会状況は、今とは随分違っていました。学生の気質は私が学生時代から、あまり変わっていないように思います。附属学校の教師として、あるいは副校長として、教育実習生にやってくる山口大学の多くの学生に接してきましたが、時代ごとに「この頃の学生は」と一括りにすることはできません。

今、山口大学で学んでいる皆さん。受け身にならずに、主体的に、学んでください。そして、大学を卒業しても、そこで学びをやめることなく、意欲のある限り生涯学び続けてください。感じ方一つ、考え方一つで、人生は、何倍にも豊かで楽しいものになります。

What's New? YU-PRSS

《 学生スタッフYU-PRSSがお届けする、山大の最新情報 》

YU-PRSSとは？

ユープラス

広報誌「YU-INFORMATION」や、
山大的WEBサイト内の「キャンパス
ライフ」ページなどの制作に携わる、
山口大学広報学生スタッフです。

YU-PRSS(*Yamaguchi University Public
Relations Student Staffの略)は、「山大学生のあなた
(YOU)にも、そうでないあなた(YOU)にもプラスになる
情報を届けたい」との想いを込めてつけられました。
現在15名のメンバーで広報活動を行っています。



YU-PRSSメンバー

入江 貴博	田里 翔太	横山 侑里
石井 沙希	武田 一志	浅沼 萌
中富 真奈	小形 智樹	近藤 守
長岡 真大	中山 拳太郎	佐能 潤子
倉増 沙和	原田 海沙	伊藤 姫花

感想、取材依頼など、YU-PRSSに
お気軽にメールしてください！

今月号についての感想や、今後こういった特集はどう
だろうといったアイデア、こんな人取材してほしい
といったご要望も受け付けています。また、「私たちが
取材してほしい」といったサークルやグループも大歓迎
です。たくさんのメールをお待ちしています。

E-MAIL: campus@yamaguchi-u.ac.jp

「キャンパスライフ」はコチラをCHECK! >>

[http://ds22.cc.yamaguchi-u.ac.jp/
~campus/campus_life%20_web/](http://ds22.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~campus/campus_life%20_web/)

01 キャンパスてくてく ツアー開催

7月19日(土)に、学生が山口大学吉田キャンパス内
をガイドするキャンパスてくてくツアーの夏の特別企
画「はじめてのやまだい」を実施しました。山口県内
各地域から6~80歳までの幅広い年齢層の参加者
85名が集まり、構内を見学しながら、各スポットで
出題される「山口大学クイズ」を楽しんでいました。



02 第36回ふしの夏祭り、ヤマミィも 元気に参加



山口大学は、7月26日(土)山口市
小郡の樺野川東津河川公園で開催
された「第36回ふしの夏まつり」に
参加しました。地域の方々との交流
を深めるとともに、2015年に創基
200周年を迎えることに関して、
ホームカミングデー(10月4日開催)
を始めとする大学で開催する行事
や山口大学創基200周年記念事業
などの広報活動も行いました。

ステージ企画の「ゆるキャラと遊
ぼう」では、山口大学キャラクター
の「ヤマミィ」も参加しました。

03 日本語・日本文化サマープログラム 2014開催

7月10日から8月6日までの4週間の日程で、韓国、
中国、台湾、マレーシア、オーストリア、フランスか
ら26名の学生が参加し、日本語・日本文化サマ
ープログラムが開催されました。この間、学生達は、
日本語学習はもちろん、地域の皆様にご協力いた
だいてのホームステイ(2泊3日)や、最終日には浴
衣を着て山口七夕ちょうちんまつりにも参加する
など、山口県の歴史・文化に触れることのできる
様々な体験をしました。このプログラムには、山口
大学の学生が各行事の運営補助として参加し、
歓迎会・送別会の司会進行を務めたほか、日本語
会話の練習の相手となり、参加者との交流を深め
ました。帰国の際には本学学生との別れを惜しむ
姿も見られました。



YU-INFORMATION

ワイユーインフォメーション
山口大学広報誌 Vol.120

山口大学総務部広報課

〒753-8511 山口県山口市吉田1677-1
TEL:083-933-5007 FAX:083-933-5013
E-MAIL:sh011@yamaguchi-u.ac.jp
URL:<http://www.yamaguchi-u.ac.jp/>

今月の NEWS & TOPICS

04 小串オープンキャンパス開催



8月8日(金)、医学部(小串キャンパス)でオープンキャンパスが開催されました。学部説明だけでなく、医学科や保健学科における体験プログラムや在学生との懇談会などももうけられており、参加した高校生や保護者の方々に医学部のことをより知っていただく機会になりました。

なお、9日・10日に予定されていた吉田・常盤キャンパスでのオープンキャンパスは、台風接近のため安全を考慮し、中止となりました。

05 学部公開説明会、新学部 含め開催

8月23日(土)、吉田キャンパスで、医学部を除く全7学部の学部公開説明会が開催されました。共通教育棟を中心に、図書館、大学会館、各学部を会場に、学部概要説明や模擬授業が行われたほか、個別相談コーナーも設けられました。また、このたびの説明会には平成27年4月に設置予定の、高いコミュニケーション能力と課題解決能力を有すグローバルに活躍できる人材の育成を目的とした「国際総合科学部」も参加し、学部概要説明、「英語で聞く授業」や「グループワーク体験」などを行いました。



06 「研究サロン」開催

9月5日(金)、吉田総合図書館1Fの「りふカフェ」において、第1回研究サロンが開催されました。本学では、平成23年度から研究に関するアイデア等を発想するキッカケを見つけることを意識する期間として科学研究週間を開設していますが、今年度からは本学の研究力をさらに高めるため、「科学研究月間」として更にこの期間を広げ、積極的にキッカケづくりを行うことにしました。研究サロンでは、様々な分野の研究者が集まり交流することにより、部局・分野を超えた研究の融合の可能性を探索する「場」となることが期待されています。

働くことについて考える ～インターンシップに参加して～

経済学部経済学科 3年 西崎 詩織

9月8日～12日の5日間、山口大学事務局総務部にインターンシップ研修生として受け入れていただきました。総務課では、与えられた仕事があり、その処理をしていくという形でした。対して、広報課では、与えられた仕事だけでなく、どうすればより多くの方に効率よく広報できるか、といったような自分で企画、考えて行動しなければならぬ場面が多くあり、同じ部署でも課が違えば仕事内容・作業方法は異なってくることに驚きました。夏休み中の短い期間ではありますが、職場体験とともに、社会人の先輩であり、人生の先輩である職員の方にたくさんお話を聞くことができ、とても良い機会になりました。ありがとうございました。



今回のYU-PRSS
ページは、私が編集
しました!

EVENTSCHEDULE 「イベントスケジュール」

10 October

03 金

AO入試
私費外国人留学生入試
(経済・工学部)
合格発表

04 土

ホームカミングデー
創基200周年記念
第4回基幹シンポジウム
吉田キャンパス

23 土

吉田キャンパス・
秋季クリーン作戦

11 November

01 土

大学祭(常盤祭)
常盤キャンパス

03 月

大学祭(姫山祭)
吉田キャンパス

08 土 ~ 09 日

大学祭(医学祭)
小串キャンパス

23 日

第61回学長杯争奪
駅伝大会
吉田キャンパス

編集発行/山口大学広報委員会

古賀和利(副学長 総務企画担当)/Alam,Djumali(人文学部)/池田恵子(教育学部)/柏木芳美(経済学部)/末竹規哲(理学部)/
玉田耕治(医学部)/堤宏守(工学部)/井内良仁(農学部)/水野拓也(共同獣医学部)/向山尚志(技術経営研究科)/
辻多聞(大学教育機構)/山口岳志(大学研究推進機構)/小河原加久治(大学情報機構)/片山信一(総務部広報課)

企画・編集・撮影・デザイン/株式会社 無限

「志」つなぎ伝える
二百年



2015年に山口大学は創基200周年を迎えます

山口大学は、長州藩士・上田鳳陽により創設された「山口講堂」をルーツとし、明治・大正期の学制を経て、1949年に地域における高等教育および学問研究の中核たる新制大学として創設されました。来る2015年(平成27年)には創基200周年を迎えます。山口大学は、地域に根ざした大学として、さらなる充実と飛躍を期し、次なる200年をより有意義なものにするための記念事業を計画しています。

2014年度

創基200周年NEWS

山口大学では、200年の歴史を多くの皆様に伝えるための講演会、シンポジウム、また、地域のニーズに合わせた様々な行事、学生の企画によるイベント等の各種記念事業などを実施します。ここでは、それら創基200周年に関連した最新ニュースを紹介していきます。



創基200周年カントダウンカレンダー

2015年5月30日(土)、創基200周年記念式典の開催が予定されています。そこで、式典開催の200日前から、山口大学Webページにカウントダウンカレンダーを掲載します。カレンダーには、カウントダウンボードを持った、学生、教職員、その他山口大学に関係のある方々の写真が日めくりで登場します。現在、出演者を募集していますので、出演を希望される方は、下記担当係(山口大学総務部広報課)までご連絡ください。山口大学創基200周年を一緒に盛り上げましょう!!



募集人数 150名程度 ※先着順
撮影場所 山口大学吉田・小串・常盤キャンパス
担当係 山口大学総務部広報課(事務局1号館4階)
TEL 083-933-5319 / FAX 083-933-5013
E-MAIL sh011@yamaguchi-u.ac.jp

創基200周年記念 第4回基幹シンポジウム詳細決定!

地域と共に育ってきた大学のこれまでとこれからの地域とのつながりやあり方を確認するシンポジウムを開催します。



日時 平成26年10月4日(土)
13:30~15:30(開場13:00)
会場 山口大学 吉田キャンパス 共通教育棟1番教室
内容 山口大学200年の歩み

特別講演 「学祖・上田鳳陽と外部」
■講師 福田百合子 中原中也記念館名誉館長
シンポジウム 「地域とのつながり これからの山口大学は」
■パネリスト 村岡嗣政 山口県知事
福田百合子 中原中也記念館名誉館長
岡 正朗 学長

詳しくは、創基200周年特設サイトをご覧ください。
<http://www.yamaguchi200.jp/>

創基200周年の詳細はここでCHECK! >> <http://www.yamaguchi200.jp/>